【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	島根県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	八束町立八束小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	２	１	２	１	１	１	２	１０	１５
児童数	４０	３３	４４	３５	４０	３８	６	２３６	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

「自ら学び、主体的に生きようとする子どもの育成」
――― 確かな学力と一人ひとりの学びの自立を支える指導の在り方を探る―――

２．研究内容と方法

（１）実施学年・教科

・重点教科・・・国語科、算数科
　国語（昨年度からの「伝え合う力の育成」をめざした取り組みの継続）
　算数（実態調査の結果からも、個人差が大きい・全校児童の傾向として弱い領域があるなどの実態があり、重点的に縦のつながりを意識して取り組む必要があったため）
・実施学年と指導体制
　２年生から少人数担当が入る。
　２年はＴＴ指導中心。中・高学年は少人数指導中心の体制で取り組む。
　(単元によりＴＴで授業を進め、途中で自己選択によりコース別、習熟度別学習)
　１年　　１クラス２０人の少人数学級での担任を主とした授業
　２年　　国語(２)算数(３)時間／週、学級担任と少人数担当によるＴＴ、習熟度別授業
　３年　　算数で週(３)時間学級担任と少人数担当による少人数指導
　　１クラス２２人の少人数学級での担任を主とした授業
　４年　　国語(２)算数(３)時間／週、学級担任と少人数担当による少人数指導
　５年　　国語(２)算数(３)時間／週、学級担任と少人数担当による少人数指導
　６年　　算数で週(３)時間学級担任と少人数担当による少人数指導
　わかば　　個に応じた指導
　ひまわり　　個に応じた指導

（２）年次ごとの計画

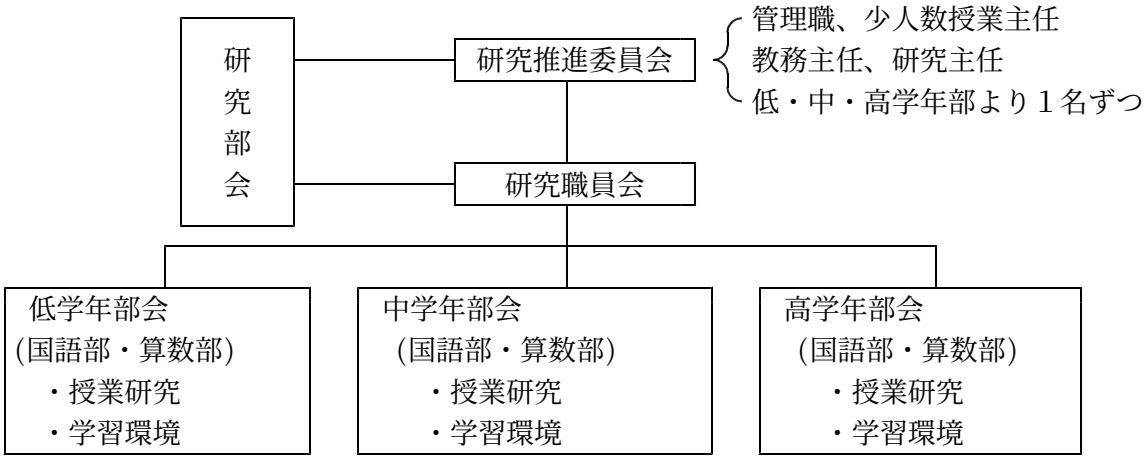
平成15年度	○テーマ・・「確かな学力」を身につけ、一人ひとりの学びの自立を支える指導の在り方を探っていく ○研究の見通し ・「確かな学力」のとらえ方について共通理解する。 ・児童の実態や保護者の願い、教職員の願い等の実態調査をもとに重点教科を決定し、研究構想の立案と研究体制の整備 ・重点教科の年間指導計画検討に併せ、研究内容・方法の検討 ・実践研究の推進（研究内容・方法等の試行)、授業の公開 ・先進校等の視察、授業公開への参加 ・中学校との連携 ・実態調査の実施(児童、保護者、教職員)により実態、意識の把握と比較検討

	・今年度の実践研究の評価と１年次のまとめ (研究主題・サブテーマ・「学力観」・研究内容・方法等の見直しも含めて) ・２年次の実践研究計画の立案、研究体制、教育課程の見直し ○研究の内容・方法 ア発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための学習教材の開発について ・学習プリント（補充←――→発展)、補助教材の開発 ・複数学年での教材研究、教材開発 ・コンピューターの効果的な活用 イ個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善について ・複数教員での指導により、課題別・習熟度別学習の成果を高め、基礎・基本の徹底を図る。 ・学年の重点単元に応じた指導体制の弾力的な調整・運用 ・教材研究、少人数授業のための打ち合わせ時間の確保 ・基礎的、基本的な内容の補充にあてる時間の確保 ウ児童の学力の評価を生かした指導の改善について ・育てたい力の設定 ・観点別到達度学力検査の実施 ――→ 指導に生かす ・自己評価力の育成と学習コースの自己選択 ・指導に生かせる学力の評価方法の検討 エその他の取り組み ・全校朝読書の実施 ・家庭学習習慣の定着 ・多様な言語活動の場の活用　学年毎にスピーチ年間計画の作成 ・共に学び合う活動を大切にした指導

平成16年度	○テーマ・・「確かな学力」を身につけ､一人ひとりの学びの自立を支える指導の在り方を探っていく ○研究の見通し ・１年次の研究成果や課題を踏まえ、２年次の実践研究計画・研究体制の修正及び実践研究内容・方法等の焦点化(実施教科、学年、実施形態等も含めて) ・重点教科以外の年間指導計画の見直し ・「確かな学力」の向上を中心とした学校全体計画の作成 ・実態調査の実施(児童、保護者、教職員)により、１年次と比較検討 ・実践研究推進、授業研究等の公開 ・フロンティアスクール間の実践の相互参観、研究成果の交流 ・学習者の自己評価、評価規準等の評価方法の見直しとより適切な評価の工夫 ・２年次の研究実践の評価とまとめ ○研究の内容・方法 ア発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための学習教材の開発について ・「数と計算」の領域について学年毎の内容を検討し、系統的な学習プリントを作成。基礎・基本の定着をめざした繰り返し学習で活用していく。 イ個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善について ウ児童の学力の評価を生かした指導の改善について エその他の取り組み

（３）研究推進体制

○実践研究の組織



○実践研究担当者

職名	氏名	担当学年及び教科
教諭	花岡　恵	１年、国語、研究主任
教諭	中島　克久	１年、算数
教諭	島崎　明子(髙木友恵)	２年、国語
教諭	金津　悦子	３年、算数
教諭	小松　明日香	３年、国語
教諭	山崎　千晶	４年、国語
教諭	曽田　三智子	５年、国語、国語主任
教諭	藤原　陽一	６年、算数、算数主任
教諭	藤井　延子	特殊学級、算数、(低学年部)
教諭	作野　浩子	特殊学級、国語、(高学年部)
教諭	本田　和隆	専科、算数、少人数担当(高学年)
教諭	野中　一正	専科、算数、少人数担当(中学年)

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

①児童の意識や態度の変容から

○Ｔ．Ｔ、少人数指導等により、複数の教員の目で一人ひとりの実態に応じた指導を心がけてきたことで、主体性や成就感が生まれ、次の学習へ意欲的に挑戦する姿が見られるようになった。

○基礎的な学力の補充にあてる時間を確保し、繰り返しの学習を工夫することによって、計算、漢字、音読などの練習の仕方が分かるようになり、繰り返し練習する姿が見られるようになってきた。基礎的な学力も定着しつつある。

○スピーチタイムや短作文など、日常的な取り組みの継続から、話すことや書くことに抵抗感がなくなり、授業中の発言も増え、自分の考えを文章にまとめることも短時間でできるようになってきた。

②保護者の意識・意見から

○Ｔ．Ｔ、少人数指導等２人の先生による指導は、先生の目が行き届きやすく、分かりやすい、先生にも質問しやすいようだ。

○子どもに応じた指導で、少しずつ学習の理解が深まり、以前よりも学習への意欲が高まったようだ。

○担任外の先生とふれあえてよい。

③教職員の取り組みから

○学期ごとに年間計画を見直し、どの単元でＴ．Ｔ指導、習熟度別指導を取り入れるのか、どういった取り入れ方をすると効果的か、取り組みをもとに探ることができた。

○Ｔ．Ｔ、少人数指導の効果を実感し、教材や指導方法について、少人数担当も加わりながら、学年部で児童の実態をもとに工夫するようになった。

○職員室の中でも、教材や指導方法、児童の様子について、学年を超えて話し合うなど、教師間で情報交換をし合う姿が見られるようになった。また、中学校教員とも、情報交換の機会が増えた。

２．今後の課題

○互いの考えを交流し合う場や、友達に分かりやすく説明する活動についても大切にしながら、今後研究を進めていきたい。

○学力の評価方法について、今年度は学年に応じて取り組んできた。今後は、さらに児童の自己評価能力育成・次時の個に応じた指導のために、全体として共通に取り組む観点や方法を再検討していく。

○地域、保護者との連携を深め、「学力」の基盤となる基本的生活能力の育成や学習環境の改善をめざして実践を進めていく。

○中学校との連携を密にして情報交換の機会を増やし、児童理解を基盤としたきめ細かな指導の継続を図っていく。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

○観点別到達度学力検査の実施（算数科）

目的：＜実施の時期により＞

学年・学級の全体的な特徴や、児童一人ひとりの課題となる点・得意な点を把握し、指導に生かしていく。

各学年の学習内容を習得している程度を測る

実施内容と時期：１年次学年始め・・・ＮＲＴ検査

学年末・・・・ＣＲＴ検査

２年次学年末・・・・ＣＲＴ検査

○到達度絶対評価ワークシートの活用（国語科、言語事項を中心に）

目的：＜使用の仕方・時期により＞

学年始め・・・前学年の学習内容の理解度を測る

単元、学期、学年末などの区切り・・・学習内容の習得の程度を測る

実施内容：各学年で身につけたい内容を中心に

実施時期：今年度は、単元・学年末で実施

○学習相談週間の実施

目的：算数ＮＲＴ検査の結果から、一人ひとりに学習のアドバイスをする場とする。
児童一人ひとりの学習についての思いや願いを知り、一緒に話し合う時間を取ることで、一人ひとりに応じた支援をしていく手掛かりとする。

実施内容：相談カードを活用。
学年だより等で、学習相談週間の実施について知らせ、取り組みに対する理解と協力を得る。
１～２週間の期間を設け、学級毎に相談時間を設定する。

実施時期：２・３学期の始め１～２週間、相談時間は放課後等。

○算数科でのふり返り（児童の自己評価）

目的：本時、あるいは小単元の学習内容の理解度について、児童自身のとらえ方と次時への願いを知り、適切な指導形態を探る手掛かりとする。
習熟度別指導の場合は、児童のコース選択の理由を知り、支援のてがかりとする。

実施内容：学年・単元に応じて、ふりかえりカード・ノートを使用

実施時期：授業の終末　記入の時間を確保

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

○地域との連携の推進、情報発信
・参観日での授業公開、参加者からの感想収集
・学校だよりによる情報発信

○他校との連携の推進、情報発信
・Ｈ１５，７，３　八束郡の学校を中心として授業公開
・Ｈ１５、１０，２１「少人数授業などきめ細かな指導研修会」（八束小）において、授業公開と研究の取り組みを説明
（「学力向上フロンティア事業松江地区協議会」への提案授業を兼ねる）
・他のフロンティア校の授業公開への参加や先進校視察

◇次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】　■１５年度からの新規校　□１４年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　■７～１２学級　□１３～１８学級　□１９～２４学級　□２５学級以上

【指導体制】　■少人数指導　■Ｔ．Ｔによる指導　□一部教科担任制　□その他

【研究教科】　■国語　□社会　■算数　□理科　□生活　□音楽　□図画工作　□家庭　□体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　■有　□無